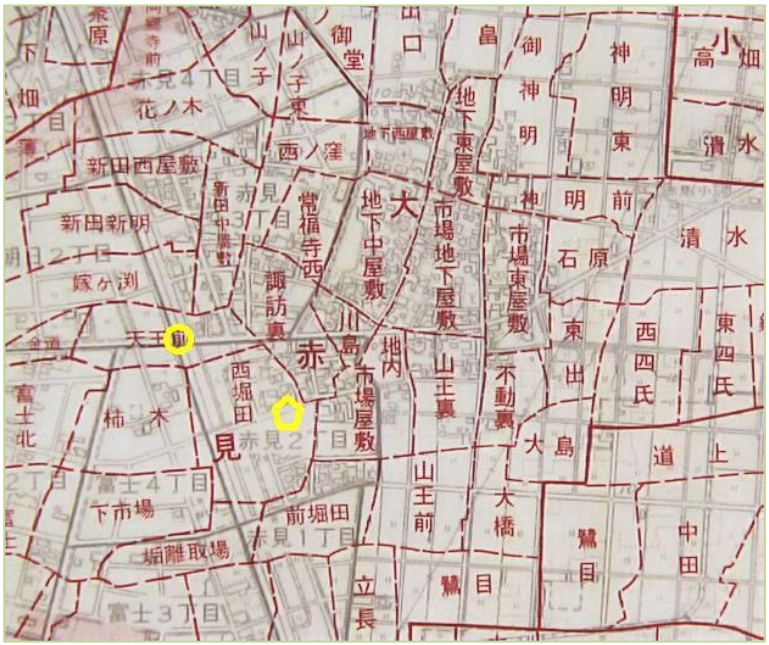
大赤見城跡

吉田光良調

大赤見城は、一宮市赤見２丁目（富士連区／旧西成連区の西大赤見、旧字名西堀田）にある神明神社の南あたりにあったという。今は、大赤見公園の南にある玉腰家の屋敷内東側に「大赤見城址」の石碑が立っているのみであり、他に遺構らしきものは何もない。

所在地を具体的に示す。名岐バイパスの朝日２丁目信号を東へ３０mほど進み１本目の道を右折、４０mほど南進し１本目を左折すると、左手に神明社・諏訪社が並んで見えてくる。４０mでなく８０mほど南進すると左手に大赤見公園が見えてくる。

大赤見城はかなり完成された城下をもっていたようである。現在も小字名に「地下中屋敷」・「地下西屋敷」・「地下東屋敷」・「地内市場屋敷」・「市場地下屋敷」・「市場東屋敷」等の字名が残っており、市場を備えた城下町時代の様子をうかがわせるものがある。



上は旧小字名図　　○が朝日２丁目信号　　⌂が大赤見公園

大赤見城の第１期築城は室町時代中期と推定される。『尾張名所図会』に「織田弾正左衛門勝久」の居城と記載されているが、勝久は織田信長より５代以前の人なので室町中期と考えられる。

第２期は、天正１２年（１５８４）の小牧合戦の防備用として再築されたようだ。第１期のような居住性はなく、戦闘城（砦）であったとされる。その年の１１月、和議の条件で廃城になったと伝えられている。

大赤見城城主は上述のように織田弾正左衛門勝久とされる。勝久には二子があり、兄の「久長」は一度父のあとを継いで城主となったが、やがて岩倉城主となり、その後は犬山の「楽田城」を築き城主となっている。久長のあとを弟の「敏任」が継ぎ、敏豊、信久、豊興と続く。豊興は「織田小平太」ともいい、母姓の「服部」を名乗って織田信秀に仕えたと言われる。

豊興の子忠次が「服部小平太」で、織田信長に従い永禄３年（１５６０）の桶狭間の戦いで敵将今川義元に一番槍をつける勲功をあげている。小平太の子「吉豊」は家康の部下となり、小田原城の役で功をたて、その後尾張に戻った。

この吉豊には二子があったが、兄に継嗣がなかったため弟の「光豊」が家督を継ぎ、やがて子孫は赤見村に土着し、代々庄屋をつとめたと伝えられている。

しかしながら「服部小平太」にはついては異説があり、彼は津島の「服部平左衛門の子」で信長に仕え、今川義元を討ち、本能寺以降は秀吉に仕え、文禄４年（１５９５）秀次事件に連座して自刃して果てたと言われている。一方、赤見服部家には小平太が今川義元につけたという槍が家宝として伝わるとも言い、どちらが正しいか分からない。

［参考］

「垢離取場」（こりとりば）

　垢は「あか」と読むが、垢離は「こり」と読む。神仏に願を立てるときに水を浴びる光景を目にすることがあるが、こういった行為（修行）を水垢離（みずごり）といい、心身の汚れを去って清浄にする目的でおこなわれる。

　現在の赤見１丁目あたりの旧字名に、「垢離取場」と言われる地名があった（上の図面左下部参照）。これは大変に珍しい字名で、「垢離取場」が「大赤見城」にどういった関係があるかはわからないが、珍しい地名として紹介した。

（参考図書）笹山忠著「尾張の城」、一宮市史西成編、一宮市勢要覧等